
彼女が遺してくれたモノ

徒立花詩人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女が遺してくれたモノ

【Nコード】

N9250X

【作者名】

徒立花詩人

【あらすじ】

あかつきゆする 明月弓弦は一年前、愛する人を失った。
ひのういかなで 彼女の名前は日ノ浦奏。交通事故だった。
ある日、失意に暮れていた弓弦は、気がつくやうと電車に乗って知らない街までやってきていた。そこで出会った一人の少女。
その少女との出会いから始まる数々の出会い。
弓弦は多くの人々に救われていく――。

(1) 『哀しみ―失意の底で』

彼女が、日ノ浦奏がこの世を去ってから一年――。
ひのうらかなで
あかつきゆうする
俺、明月弓弦には何も残されていなかった。

かなで
「奏……」

他のことなんてどうでもよかった。俺には奏しかいなかったんだ。
初めての、俺だけの居場所だった。

彼女は、唯かなで一俺を必要としてくれる人だった。だからこそ彼女がいれば、奏が隣で笑っていてくれれば、それだけで俺は幸せだった。
彼女は無味乾燥だった俺の人生に、生きる意味を与えてくれた。

俺は彼女が大好きだった。

彼女も俺を好きだと言ってくれていた。

こんなにも情けなくて、弱くて、ダメな俺でもいいと、俺でなきゃ嫌とまで言ってくれたんだ。

それでも……今だからかもしれないが、ふと思うことがある。

『もしかしたら彼女は俺と出会わない方が幸せだったんじゃないか』

俺と出会わずにそれまで通りの日常を過ごして、不器用でも俺なんかよりもずっといい人と恋をして、その人の隣で笑っていた方が、ずっと幸せだったんじゃないかって。俺と出会ったから、こんな哀しい結末になってしまったんじゃないかって。

一年間、ずっとそんなことばかり考えていた。朝起きて、食べて、働いて、寝る。余暇に相当する時間もがむしやらに潰してきた。遊ぶわけでもなく、仕事が終わったらバイト先に出向いて、深夜まで働いたら、家に寝に帰る。忘れたくて、逃れたくて、嘘だったんじゃないかと、夢だったんじゃないかと思いたくて、身体に染みつい

た習慣通りに日々を費やしていた。

そうしないと壊れてしまいそうだった。

本当はこの街からも離れたかった。道や店や公園や病院を見る度に、彼女の笑顔が、思い出がよみがえってしまう。泣きそうになつてしまう。

『ずっと一緒にいてもいいですか？』

一緒にいてくれるんじゃないかったのか。どうして今、隣には誰もいないんだよ。なんで……どうして奏^{かなで}なんだよ。どうして奏^{かなで}じゃなきゃいけないかったんだ。なんで俺じゃないんだよ。なんで俺の方を殺してくれなかったんだよ。奏^{かなで}が……死ぬことなかったじゃないか。何度も通った思考の痕跡を再び繰り返すように頭に響く。

奏^{かなで}は最期まで笑っていた。瀕死の身体なのに、俺を安心させようと最期まで微笑んでくれていた。俺は彼女を守ってやれなかったのに彼女は俺を心配していた。

周りは俺に気を遣ってくれた。

でもそれを感じる度に心が痛んだ。

彼女が残してくれたモノはみんな目の届かないところに追いやつた。彼女を思い出させるようなモノはみんな隠した。

ただ嫌なことから逃れるように。

『私は弱いんです。でも弓弦^{ゆず}くんと二人なら強くなれる気がするんです』

俺もだ。一人だとこんなにも弱い。奏^{かなで}のことを思い出すだけで胸が詰まる。息ができなくなる。喉を絞められたように苦しくて、時には涙が止まらなくなる。

『頑張ってください弓弦^{ゆず}くん。私も頑張りますから』

『絶対に、諦めたらダメです』

『弓弦くんが泣くと、私まで泣きそうになってしまいますから』

『ごめんなさい……』

『うれしいです。本当にうれしいです』

.....

気がつくと、俺は電車の中にいた。

見慣れない風景が窓の外に広がっている。車窓の半分を覆うような広い海。あの街からはかなり離れている。

車内には俺以外誰もいなかった。

腕時計を見ると、もうとつくに仕事は始まっている。たぶんアパートの電話が何度も鳴っているだろう。そう思って携帯電話を出すと、三件の不在着信が来ていた。二件は職場から、一件は同僚からだ。

（何やってんだ……、俺は）

仕事をサボって、こんなところで何がしたかったんだろう。暇な時間、一年もの長い間ずっと、出来る限り塗り潰してきた隙だ。

次々と溢れるように奏かなでとの思い出が脳裏に浮かんでくる。

（あの頃に戻りたい……）

目頭が熱くなる。頬を伝う一筋の涙。

もう涸れたと思っていたのに。この一年で流し尽くしたと思っていたのに。俺は泣いていた。

「奏かなで……！」

この世界が嫌になっていた。

俺の大切なもの、俺が守りたいものを容赦なく奪っていつてしま
う。もうこの世界に大切なものは何も無い。俺のいる意味も、価値
も、理由も、何も無くなってしまうた。

生きていてもしょうがない。

電車を降りる頃には、そんなことまで考えていた。

そこは終点より二つ手前の駅だった。なぜ降りようと思ったかも
よくわからない。ここに来るまで降りる気すら失せていたと言うの
に。しかし、自ら命を絶つことすら考えていることに変わりはない
った。

自分でもおかしいってことぐらいわかっている。それでも、死ね
ば悲しみから逃れられる。このときの俺にはそれで十分だった。俺
の心には、絶望しかなかったのだから。

だからだろう。駅のホームが俺を誘っているような気がした。

コンクリートにあいた長い溝。その下に続く線路が、救いの道に
見えた。この道なら奏かなでの所に連れていってくれる、そんな気がした。

.....

どれくらいたったかわからない。

駅のホームにベルが鳴り響いた。もうすぐ電車が入ってくる。

ホームには誰もいないようだった。俺は一步步進んだ。

その時だった。電車がホームに入ってきて、俺が飛び出そうとし
た直前。

「ダメえっ！」

後ろから声がした。

次の瞬間、俺は強く引つ張られ、柔らかい何かに押し倒された。
直後、滑るようにホームに入ってきた電車は、何事もなかったよ

うに停車した。

「死んじゃ……ダメですっ……」

女の子の声だった。幼いようで落ち着いた、どこか懐かしい、気持が安らぐような声だった。そう、彼女に。

かなで
奏に似ているのだ。

俺の服の肩の辺りをぎゅっと握り締め、押し止めるように俺の胸板に頭を押し付けている少女がそこにいた。

「貴方が死んだら、私は悲しくなりますっ。だから死なないでくださいっ」

俺が身体力を抜くと、その少女はようやく顔を上げた。

「……!?!」

俺は目を疑った。

「死んだら全部終わりです。生きていればきっと、いいことがありますから」

ひのうみかなで
日ノ浦奏がそこにいた。一年前と何も変わっていない。しかし、いつになく真剣な眼差しを俺に向けていた。

「か……かなで奏っ!」

かなで
思わず叫んでいた。叫ばずには、呼ばずにはいらなかった。

奏は、面食らったように目を丸くすると、心配そうな顔で身を起こす。

そして、俺の額に手を当てた。

「熱はないようですけど……もしかしてさっき頭を」

かなで
「奏!」

「きゃっ」

上半身を起こしてその手を掴み、華奢な身体を抱き寄せる。
強く、しがみつくように抱きしめた。

離れたくなかった。放したくなかった。失いたくなかった。ぼろぼろと、目から涙が零れる。どうにも止められない。拭いても拭いても、流れ落ちてくる。だって……。

かなで
奏は立てないのだから。

かなで
やっぱり奏は死んだのだ……。

そこだけは、それだけはどんな奇跡が起こっても逃れられない現実だった。

かなで
この女の子は奏じゃない。

かなで
たぶん俺や奏とは全く関係のない人生を送るはずだった女の子だ。そんなことは自分でもわかっている。

それでもこうするしかなかった。それほどまでにそっくりだった。我を忘れるほどにこの女の子は奏に似ていたのだ。かなで
奏そのものだった。

女の子は、叫ぶことも、抵抗することもしなかった。

ただ黙りこくって、俺の腕に身を委せていた。俺は声を上げて泣いた。子供のように泣いた。彼女を、かなで
奏を想って泣き続けた。

(2) 『光明―新たな縁に』

「落ち着きましたか？」

俺は公園のベンチに腰かけていた。

隣には、かなで奏と瓜二つの女の子が座っている。

わずかに茶色がかった黒髪も、優しげな瞳も、病弱さを感じさせない表情もかなで奏そっくりだった。高校の制服らしい深緑色のブレザーを着ているから、かなで奏よりも年下なのだろうが。

「ああ、大丈夫。……ごめんな」

こんな初対面の、しかも男にいきなり抱きつかれても、その上目の前で泣かれても、この女の子は逃げなかった。ただ、俺が落ち着くまで待っていてくれた。久しぶりに人の優しさを感じた。

「何か……あつたんですか？」

彼女はそう訊ねてきた。

同情でもよかった。彼女には迷惑をかけてしまったから。

でも、うまく言葉が出なかった。

俺が黙ったまましていると、彼女は、あ、と、口を押さえた。

「私、いのうえみや井上美矢っていいいます。美しい矢って書いて美矢みやです」

「あかつきゆずる明月弓弦。明るい月に弓の弦って書くんだ。よろしく」

「私たちの名前、弓と矢ですね。なんか面白いです」

「ハハ、そう言われてみるとそうだね」

精一杯明るい声を取り繕って答えた。

「それで……えっと……私のことを、奏^{かなで}、って呼んでましたよね。もしかして恋人の名前ですか？」

核心だった。

妙に勘が鋭いところも、やはり奏^{かなで}を思い起こさせる。

「ああ、音楽を奏^{かなで}で、奏^{かなで}だよ。綺麗な名前だろ？」

「はい、とても綺麗です」

「君に……美矢ちゃんって呼んでいいかな。美矢ちゃんにそっくりだったんだ。普通の姉妹とかそんなじゃなくて、双子よりもそっくりだ」

「私が……ですか？」

「うん、ほら」

ポケットから出した携帯のデジタルカメラフォルダに入っていた写真を見せた。

俺が車椅子を押して、一緒に散歩に出たときに撮った、幸せだった頃の写真だ。

美矢ちゃんは、それを覗き込むように見ると、本当だ、と静かに呟いた。

「失恋ですか？」

「うつん、そうじゃない」

「喧嘩でもしたんですか？」

「ハハ……できたらいいな」

「っ！……亡くなられたん……ですか？」

「一年ぐらい前に、交通事故でね」

「……ごめんなさい……」

美矢ちゃんはつらそうな表情になって、うつむいてしまった。

「別に美矢ちゃんが謝ることないさ。さっきはそれでつい取り乱しちゃったんだ。ごめんな。驚いたろ」

「いいえ、あ、その……びっくりはしましたけど、それより明月さんが心配だったので……すいません。大丈夫です」

「ハハ……、美矢ちゃんは本当に奏かなでに似てるよ。優しいところも、すぐ謝るところも。だからさ、美矢ちゃんを見てると、なんか奏かなでが……帰ってきた……みたい……で……」

また涙が溢れてきた。

世界が揺らぎ、声が震える。奏かなでの顔が、声が、頭の中に浮かんてくる。

周りは怖いほど静かだった。

「は……はは……ホント、ダメだよな俺……あいつがいないと何も

……できなくて……」

涙をむりやり袖で拭う。

隣を見ると、美矢ちゃんまで目に涙をいっぱい浮かべていた。涙脆いところまで、泣き顔まで奏と重なってしまう。

「私は……井上美矢です。奏さんじゃありません。でも、今だけは奏さんでいいです。弓弦くん、でいいですか？ 弓弦くん……奏です。弓弦くんのことが大好きな奏です。今だけは泣いていいです。本当は、泣くのはあまりよくないです。でも今だけは泣いて下さい」

その声を、奏の声を聞いた時、自分の中のどこかで外れた。

「……かな……で……奏え！ なんて死んじまっただよ……！……なんで俺を置いていったんだよ……なんて……なんで……！」

泣き続けた。日が真上に上るまで、ひたすら奏の膝に顔を埋めて泣き続けた。遠い日の思い出を思い出しながら。

「弓弦くん。いつかでいいです。私を、私の影を追いかけるのはやめてください。私の悲しい出来事は忘れてください。綺麗な思い出にしてください。そして」

奏は、俺の背にそっと手を置いた。そして感触を確かめるようにゆっくりと撫でる。

「幸せに、なってくださいね……」

幸せだった。

奏と過ごしたあの日々が一番幸せだったんだ。奏が隣で笑ってい

た時が一番心地よかつたんだ。安らぎを覚えていたんだ。ずっと続くと思っていた頃が、^{かなで}奏がいた頃が最高だったんだ。

『幸せになってくださいね』

.....

「もうおしまいです。^{あかつき}明月さん。私はもう井上^{いのうえみや}美矢です。^{かなで}奏さんじゃないですから、泣かれても困ってしまいます」

「ああ……ああ……ありがとう……」

この一年間は現実から逃げ続けていた。
目を背けていた。
認めたくなかった。
嘘にしたかった。
怖かった。
悔しかった。
^{さみ}寂しかった。
壊れてしまいそうだった。
そして、幸せじゃなかった。

「^{あかつき}明月さん、目が真っ赤に腫れちゃってます」

もう、そうじゃない。

奏はいなくなってしまうた。もう会えなくなってしまうた。
その現実かなでは、奏かなでの死は、すんなり自分の中に受け入れられていた。
いや、いつのまにか自分の中にあつた。気がつかない内に認めていた。

不思議と涙はひいていった。

もちろん悲しくないわけじゃない。

でも大事なことに気がついた。思い出したんだ。今まで目を向
けようとしなかったから気がつかなかった。

奏は最後まで、自分の命よりも俺のことを心配していた。かなで 奏は…
俺のこの一年を心配していたんだ。

やっと気がついた。

気づくことができた。

目の前にいる少女、井上美矢いのうえみやによって。

俺は今日、この子と会うためにここまで来たのだと悟った。

「ありがとう。美矢ちゃんみや」

「どういたしまして、と言いたところですけど気にしないでくだ
さい。私がやりたいことをしたからですから」

そう言つてニコリと微笑む美矢ちゃん。

奏かなではあまり濃い色の服を好まなかったから、深緑色のブレザーが
新鮮だった。もしかしたら、奏かなでも来てみればこの色が似合っていた
のかもしれない。

そこで疑問に思った。

「美矢ちゃん…もしかして今日学校…だったんじゃない」

美矢ちゃんはきよとした顔で首をかしげた。そして、次の瞬
間、あ、と小さく呟いて、口を手で押さえた。どうやら完全に忘れ

ていたらしい。

「今日はサボっちゃいました」

「俺のせいだ。ごめん」

「違いますよ、あかつき明月さん。私は元々そんなに真面目な生徒じゃないんです。今日は最初からサボる気だったんですから、あかつき明月さんのせいじゃないです」

美矢ちゃんはそう言って屈託なく笑う。俺もつられてつい吹き出してしまった。

「美矢ちゃん、お礼してもいいかな」

「ダメです」

即答だった。

思わず顔を見ると、困ったように眉を下げ、口元だけは笑っていた。かなで奏も含めて初めて見る表情だった。いわゆる苦笑いというやつだろうか。

「さつきも言ったと思いますけど、私が勝手にやっただけです。やりたかったからやっただけです。あかつき明月さんのために何かをしたわけじゃないのにお礼なんてされたら困っちゃいます」

どこまでも無欲で、優しい子だった。

「気が済みませんか？」

わざわざこう聞いてくる辺りも素直さの表れなのだろう。

「ああ、そうだね。気が済まない」

「そうですか……。では私とお友達になってくれませんか？」

「え？」

「偶然会った友達がたまたま優しくかったら、私もつい甘えちゃうかもしれない」

美矢ちゃんはそう言って悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「ああ……。そうだな。美矢ちゃん。俺と友達になってくれないか？」

「はいっ」

すごく幸せそうな笑顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9250x/>

彼女が遺してくれたモノ

2011年10月26日18時15分発行